



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	台湾における青少年のための地域学習施設の意義と今後の課題 ; 台北県三重市における青少年基地の実践例から
Author(s)	呉, 玟 諭; Wu, Wen Yu
Citation	社会教育研究, 29, 11-30
Issue Date	2011-08-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47259
Type	departmental bulletin paper
File Information	No.29Wu.pdf



台湾における青少年のための地域学習施設の意義と今後の課題

—台北県^{サンツォン}三重市における青少年基地の実践例から—

ウウエンユ
吳玫諭

目 次

はじめに	1 1
1. 台湾における青少年支援	1 2
(1) 青少年政策白書	1 2
(2) 台湾の青少年支援	1 3
2. 台北県三重市	1 3
(1) 三重市の概要と特徴	1 3
(2) 三重市からみる青少年と青少年支援	1 4
3. 青少年の地域学習施設—三重青少年基地の展開過程	1 4
(1) 人本教育基金会の一組織である青少年基地	1 4
(2) 青少年基地の歩み	1 8
4. 青少年基地における青少年支援の実態	2 0
(1) 様々な側面からの青少年支援	2 0
(2) 基地の子たち	2 4
(3) 基地の直面する課題	2 6
おわりに	2 7

はじめに

台湾の青少年の悩みについて語るには、一つの数値を挙げたいと思う。それは高等教育（大学や放送大学、短期大学など）進学率である。台湾の2010年度の高等教育進学率は、高校生平均率が95.27%で、職業高校生の平均率が79.64%である¹。こういう高い進学率を示す台湾社会はまさに学歴社会である。また1990年代から続いてきた教育改革も様々な批判的な声にさらされ、国民に不信感を抱かれ、問題が生じている。こういう時代に生きている台湾青少年は、台湾国内では1987年の戒厳解除後から継続してきた脱被植民地の意識変化に、多民族による一つの国としてのアイデンティティーの構築と、全世界における経済の動揺や地球環境保全の意識から生まれた新価値観の再生という新旧混雑で

ありながらも、新しい「何か」が求められる時代に直面している。この不確定の時代に生まれた青少年の大変さは確かなものである。学校では成績が優秀で確実に進学の道が進められる青少年はまだ学歴重視の台湾では保護されるが、成績が悪く、経済的に余裕のない子たちはこの学歴社会の台湾では落ちこぼれの問題青少年になりかねない。しかし、先にあったのは「青少年の問題」であり、青少年の問題が緩和されずに最終的に「問題青少年」が生まれたのである。台湾では、それらの問題をよく公的には学校で補い、そして家庭に家庭教育の責任を要求するというスタンスを取ってきた。が、もし学校と家庭からの支えが得られずに、逆に排除されてしまったら、一般の青少年も含め、誰でも、「問題青少年」になりうる。

本稿で筆者は台湾社会に対する批判と反省により、「青少年のニーズは何か？青少年の抱える問題が深刻化する前に、いかなる支援を行えばいいか？」という問題意識で青少年の支援の仕方を現状に即し、答えを探りたいと考える。ここで、筆者は学校と家庭以外の地域である「第三の場」、すなわち社会教育の視点で行う青少年支援の可能性に着目した。

研究対象と方法

本稿では、12 歳～18 歳の青少年を主な対象にし、非行青少年から一般青少年まで、背景は問わない。また、第三の場—地域学習施設というのは、「家」と「学校」以外に、地域に所在する青少年を対象にした支援施設であることを示す。その「学び」は学習塾の学びと違い、学力を上げるためではなく、青少年たちが人生を歩んでいくために必要とする力づけ、即ちエンパワーメントという意味で捉えることをここで断っておく。

研究方法として、筆者は台北県三重市の「青少年基地」を研究対象とし、実践者と青少年に対するインタビューを含む、2010 年の 4 月から 9 月までの半年の期間にわたったアクションリサーチを行った。現実を踏まえ、彼らの試みを分析し、青少年を対象にした地域学習施設の意義と課題をさぐる。

1. 台湾における青少年支援

(1) 青少年政策白書

台湾のはじめての青少年政策白書は 2005 年に発布された『青少年政策白書』²である。政策の中で「*青少年に対する投資は即ち台湾の未来に対する投資*」というスローガンが掲げられ、青少年を国家発展に重要な位置づけをしていることが分かる。

青少年政策白書では四つの軸と目標が書かれている。「*発展—青少年の発展は国家の競争力を向上する、參與—青少年が公共参加して公民社会を構築、健康—青少年の健康を促進して良質な生活を作る、保護—青少年を保護して社会の平和を保つ*」。

今まで台湾の児童青少年政策は事後補正と保護という側面に偏る傾向が長年続いており、それを改善しようとし、青少年の発展、公民社会の参与の側面における公的な政策による支援をする政府の革

新の意思が見られる。

しかし、この政策白書はまだ法案作成に至らず、中央政府から地方政府に至る各レベルの政府機関の青少年支援体制と資源分配はまだ整えられていない。また陳³によれば、青少年を国家の資産とするのは青少年を「物象化」する恐れがあることと、スローガンをあげ、抽象的な政策目標で終わり、具体的な計画に欠けるという指摘もある。それに、生涯教育や非正式な教育の重要性が言及されたものの、その内容は学校教育の補強が中心になり、それ以外の学校外教育支援の具体的施策がなかった。結局、それは学校教育にすべての責任を帰し、公的に行われる学校以外の教育支援体制づくりの必要性から回避したことになる。それは、地域にある個々人の力に目を背けるような態度の表しである。青少年支援は学校と家庭だけの責任ではなく、地域社会全体にわたる支援体制が必要であることを重視するべきである。この点に関しては、青少年政策白書において、過小評価されたと考える。

(2) 台湾の青少年支援

楊 (2001) ⁴によると、「台湾の社会教育施設は青少年教育施設に欠け、現在では台北市と高雄市にのみ、一定規模の青少年育楽センターがある」ということが分かる。筆者の調査によれば、2010年の現在になっても、この状況はまだ続いている。台湾社会は生涯学習社会へとシフトしている現在、青少年はその枠組みからはずされた。

一方、台湾の社会福祉センターを訪ねると、「高危険少年（不登校、社会不利益層、虐待など）」、「虞犯及び犯罪少年」に対する支援が主要業務であり、そうでない所謂一般の青少年への対応はなるべく避けたいというような状況が存在する。台湾では、多数な「一般的な青少年」に対する学校以外の公的な支援と資源の保障はできていない。現に、台湾における青少年研究も学校教育と家庭教育に青少年支援の完全なる責任を帰することを前提にし、社会福祉、犯罪学、心理学、青少年の行動分析といった視点での分析が多く、社会教育における青少年支援は過小評価する傾向にある。

もし、青少年たちの、学校と家庭から健全な体制で支援を得ることが出来れば、青少年問題は深刻にならずに緩和されるはずである。ところが、現実では台湾の青少年の問題は多く学校と家庭に起因する。学校と家庭の両方のどちらからも排除される境遇に陥った青少年は、現在の社会教育視点が欠けた台湾青少年支援体制ではまだ処置できておらず、大きな課題が残されている。

2. 台北県 サンツォン 三重市

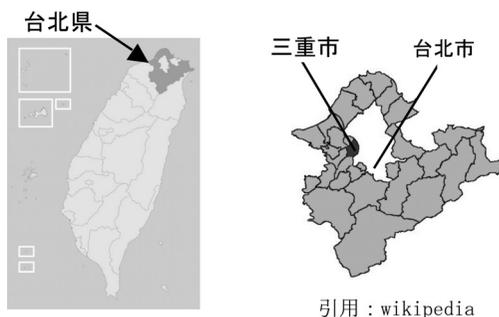
(1) サンツォン 三重市の概要と特徴

三重市の基礎資料^{5,6}：

総面積 163170 平方メートル

世代数 139882

人口 390037 人



三重市は台湾の台北県に属し、台湾の首都である台北市と橋一本で離れ、家族や個人経営の小さい工場が多くある。交通便利で比較的到家賃が安いと、台湾中部や南部から、都会である台北に出稼ぎしてきた移住者は多くここを住みかとした。現在ではブルーカラーの労働者階層は人口の最も多くを占めている。また、複雑な背景を持つ人々が頻繁に出入りすることで、治安がよくなく、暴力団が多いという地域だということでも名が知られている。

(2) 三重市からみる青少年と青少年支援

三重市を含め、台湾の多くの青少年は朝 7 時から午後 5 時くらいまで学校におり、放課後は更に 9 時まで学校で夜間自習⁷をするか、10 時まで塾に行くか、家に帰るかという選択肢しか残されていない。青少年には「勉強」ということしか殆ど期待されていない。

三重市では青少年と地域住民に十分な社会教育機会と施設を提供しているとはいえない。しかし、資源と空間の整備の問題以前に、台湾の青少年が置かれた教育と生活状況も彼らにその社会教育資源を手にする余裕すら与えないのである。胡⁸ (2009 年) の調査から、台北市の高校生がよく行うレジャー活動はインターネット、テレビなどのインドア活動であり、また学校の夜間自習と放課補習授業などが原因で大半の放課後の時間が自由に使えず、レジャー活動を行っていくことが分かった。「青少年政策白書」でも、青少年のレジャー活動参加を阻害する主要な原因は「学業からのストレス」、「時間不足」、「資源不足」など書かれている。青少年のニーズにあわせた公的な支援や、ソフトとハード両方での資源と空間が整っていないという状況が続いていながらも、青少年にアウトドアのレジャー活動参加をすすめたり、現実では今まで以上に生徒を長く教室にいさせて勉強をさせるというような、青少年に一方的に要求し抑圧するという姿勢は、青少年の問題解決にはまだ遠いように思う。

しかし、公的資源が少ない状況に、青少年のニーズに応じるように、民間団体がすでに動き出し、青少年の学習支援の試みを模索しながらも、彼らの実践を通じ、青少年の力づけになっている。次に、三重市に所在する組織「三重青少年基地」の実践とアプローチを通じ、学校外に社会地域に所在する青少年を対象とした学習施設の意義とその課題について検討したい。

3. 青少年の地域学習施設—三重青少年基地の展開過程

(1) 人本教育基金会の一組織である青少年基地

① 「財団法人人本教育文教基金会」からはじめる

三重青少年基地の実践を語る前に、まずその所属の「財団法人人本教育文教基金会」について説明する（以降は「人本教育基金会」や「人本」として記す）。

「人本」は 1987 年の戒厳解除と同じ年に設立された NGO であり、台湾で最も知名度の高い社会運動団体の一つでもある。設立当時は「人本教育促進会」という名からはじまり、5 人の大学教授や知識人によって発足した。彼らは、台湾が「病んでいる」ことに気づき、その根源は「教育」だと考え、台湾社会の改革を望むなら、根本的な教育改革からはじめるしかないという信念に基づき、教育改革を中

心にその影響力をもたらし続けてきた。その名の通りに、彼らは人本教育（Humanistic Education）という価値観をベースとし、「人間自身が目的であり、道具ではない」また「教育は、人間を自分自身でいるようにすることを可能にした」という理念を持ち、その信念を貫いている。

② 政治色を持つ社会運動団体—人本教育基金会

現在は森林小学校⁹の校長である朱台翔が 1997 年の設立十年目の特別企画でうけたインタビュー（当時は基金会の取締役であった）の内容で、なぜこの道を歩み始めたのかについてこう書いてある。

「…民国 67 年（西暦 1978 年）の美麗島事件¹⁰が発生した…その不自由な時代で、彼女はほかの人々と同じように、政治に触れるべからずと警告された。しかし、すべてのメディアが、一方的に『美麗島事件中の暴民たち』と言う報道を見て…主権者が隠蔽しようとした真相の概ねの輪郭を描くことができた。『この事件は私の人生の転機となった。私は主権者の醜さを知り、そして二度と戻らないことを決意した。体制内の順民として二度と戻らないことをね。』」

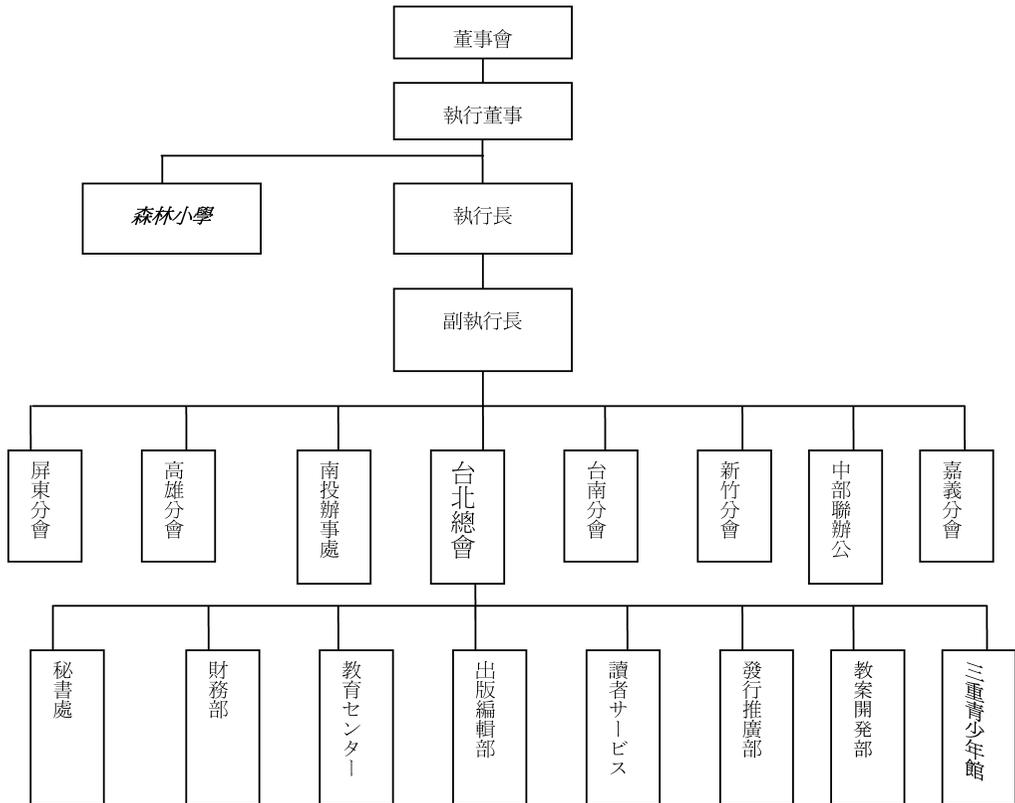
戒厳時期の台湾社会は軍事政権の下で、言論の自由がなく、政治への参加が制限され、学校教育を通じた思想のコントロールが人を「モノ」として扱い、そして抑圧していた。こういう人間的ではない社会を「人本」がいち早く察し、そして改革を呼びかけようとした。1994 年から始まる台湾の教育改革の動きには、「人本」はその動かす手になり、また社会教育において、現在、台湾で最も知名度が高く、各地域に多く所在し、その影響力を発揮している社会教育施設「社区大学（community collage）」の設立にも、「人本」がかかわり、指定管理者として運営を任せられたこともある。設立当時から「人本」が台湾における小中高校教育の不正行為、例えば体罰、学内補習など大人と学校側が子どもに加えた理不尽かつ不法な行為には、固く批判的である。こういう堂々と学校と対立的な立場に立つことが、人々に衝撃を与えた。保守派や異なる立場に立つ人々は賛同しがたい部分もあり、また逆にその影響力で台湾社会を新しい方向へ導いてくれる存在であるように思う人々もおり、「人本」は台湾社会では賛否両論の評価を得ている。

③ 人本教育基金会の関わる事業

次は「人本」のプロファイル冊子を参考にした組織図で、彼らの「仕事」の概略を説明する。

2003 年の 8 月には各地の支所を含め、「人本」のスタッフは全部で 127 名である。台北総会は最もスタッフ人数が多く、「人本」の全体的な業務や財政などを管理する以外に、出版部門や教育方法開発などの部門もある。調査地の「三重青少年基地（館）」も台北総会の一つの部門に属し、人事と物資や運営資金などの殆どは台北総会から支援され、管理される。「人本」は、学校教育の不正行為に対する告発のケース受理や、有償で行う成人向けの親教育（parent education）講座と研修会や、子どもを対象としたオルタナティブな学習講座の提供や、冬期夏期の休み期間中に行われている体験学習活動（一週間以上つづく海外都市巡りや、三日間のアウトドア活動…）などの通常業務以外に、二つの拠点で子どもと長期的に接する施設が設置されている。それは「森林小学校」と「三重青少年館（基地）」である。

人本教育基金会の事業部門関係図：



※出所：人本教育基金会プロフィール、2003年版

④人本教育基金会の下にある二つのオルタナティブ学校

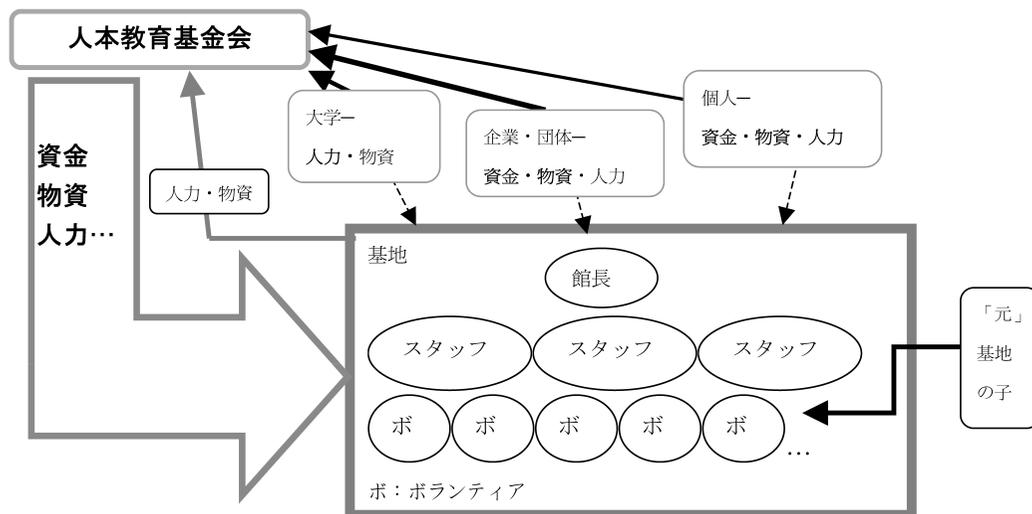
「森林小学校」は政府に認証された小学校になっており、台湾のサマーヒルスクールと呼ばれる。運営は授業料と親の寄付金から資金を得ているために、一学期の授業料は約 15 万元（約 40 万円）で、¹⁴経済的に余裕のない家族であれば、入学できない。

もう一つの拠点は本稿の調査地であり、台北県三重市に所在する「三重青少年基地」である（以降は「基地」と称する）。正式には「学校」として認証されていないが、無償の青少年支援施設として 12～18 歳の青少年を対象に様々な学習活動を実施している。

⑤ 基地の支援体制

基地では現在、館長 1 名にスタッフ 3 名に、ボランティア数名という体制で青少年ワークを行われている。

基地の支援体制図：



基地のすべてのスタッフは館長を含め、青少年に対する学業支援や補習授業をクラス分けで担当しており、青少年の悩み相談や生活指導は全員で行う。他に、各個人の趣味や特長を用い、サークル活動や特別議題の討論会の開設も担当する。

基地の館長とスタッフの背景や仕事内容：

	背景	基地内での仕事内容	「人本」に対する仕事内容
館長 Jさん	1995年に「人本」に入り、2003年に基地の館長に任命された。基地に来る前には人本の森林小学校の主任を勤めていた。青少年と小学生生徒に対するサポートの内容が少し異なるが、直接に子どもと接触し、サポートすることはすでに経験が積み重ねてきた。	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校3年生に対する学業サポートクラス ・青少年の悩み相談、生活指導 ・進路相談 	<ul style="list-style-type: none"> ・講座の開講者 ・体験活動の指導員 ・台北総部の会議、活動の参加
副館長 Aさん	三重育ちであり、地元で貢献できることをしたくて、2003年に基地に就任した。その以前に「人本」の体験活動と森林小学校の指導員をしていた。	<ul style="list-style-type: none"> ・補習授業の数学クラスを担当 ・青少年の悩み相談、生活指導 ・髪のリズムに対する基地外の青少年の担当相談役（「反髪禁自治協會」） ・デザート部、DIY部 	<ul style="list-style-type: none"> ・体験活動の指導員 ・台北総部の会議、活動の参加
スタッフ Bさん	大学時代（児童と家庭学科）に開館まもなくの基地で研修をし、大学卒業後（約2003年）にそのまま基地で指導員として就任した。	<ul style="list-style-type: none"> ・補習授業の英語クラスを担当 ・青少年の悩み相談、生活指導 ・体験活動のコーディネーター ・会計係 	<ul style="list-style-type: none"> ・体験活動の指導員 ・台北総部の会議、活動の参加

スタッフ Cさん	三重在住で、大学の美術学科卒業のために、基地の宣伝物や飾りなどを作ることを担当している。基地に来る以前に「人本」の指導員をしていた。	<ul style="list-style-type: none"> ・補習授業の数学クラスを担当 ・青少年の悩み相談、生活指導 ・DIY 部、アート展の案内役 ・美術や宣伝資料を作ることを担当 	<ul style="list-style-type: none"> ・体験活動の指導員 ・台北総部の会議、活動の参加
-------------	--	---	---

ボランティア：

基地の支援体制図のように基地では、スタッフ以外に数名のボランティアもいる。元基地の子に、「人本」の職員や蓄積されてきたボランティアが主な二つのリソースである。彼らは主に補習授業の数学と英語クラスの TA (teaching assistant) やサークル活動の指導員（例えば、ピアノ部）や特別講座の開講者（例えば、マドンナについての講座、台湾歴史の講座等）という役割を果たしている。



出所：筆者撮影

(2) 青少年基地の歩み

① 住宅街の旧倉庫からはじまった青少年施設

「基地」の設立は三重^{サンツォン}地域の大人の地域と子どもたちに対する思いから始まった。三重市在住の L さんとその奥さんは治安が悪く、青少年問題が頻繁に起きるこの地域では、何かの機会に子どもとこの地域にいいことをしてあげたいとおもいつづけてきた。彼らは「人本」の出版した『人本教育札記』を読み、共感を持ち、2001 年の 6 月に物置として使われていた自家の建物を「人本」に無償で貸し出した。後に、L さん夫妻は基地の実践を肯定し、この建物を「人本」に寄贈した。

基地をどんな場所にしたいのか

「人本」はこの好意を受け、青少年のための空間にしようとして青少年館の設立に励んだ。建築家、まちづくりの専門家（「台湾大学建築とまち研究発展基金会」）、中央研究院社会学の専門家などを誘い、人本教育の青少年ワーカーと共に何回かの会議と現地調査を経て、その建物のありかたや今後の方向性について語り合い、構築していった。

「青少年にもう一つの場所を提供する」、「ここを青少年の遊び場にしよう」、「地域の学習のセンターにし、全体の地域に学習と向心力を与え、まちづくりと繋ごう」、「不登校生や中退生のための学校にしよう」、「住宅街にあるから、地域住民の信頼を得て、彼らの活動の場にならないとこの建物を受ける意味がなくなるから、青少年館と言っても、親と子どもと学校先生の交流の場でもある」、「喫茶店みたいにバーを作ろう」、やむを得ずに家出したり、不登校の子が一時的に休める場所になるためにベッドを置く…など様々の可能性が語られ、議論された。会議の最後に、基地を「体育活動、ワークカウンセリング（「工作治療」、環境保護、社交の場」という機能を備えた場所にするとの目標にした。基地の開館初期に「人本」が基地に対する期待は以下のように書かれた。

「青少年館の設立を通じ、三重地域の住民に貢献し、親教育の質を向上させ、さらに重要なのは

「青少年に学習的かつ建設的な余暇の場を提供することを期待したい」¹²。

青少年だけではなく、その親や地域にも開かれた学習の場として、教育のあり方を変革しようという意欲が伺える。

基地の支援対象は12歳～18歳の青少年に設定され、三重地域を中心に、いかなる背景を持つ青少年であっても、基地に来ることができる。最初、この建物をどういう名前にするのかについて話し合われ、山登りをするとき途中で休憩をとる場—「基地台」のように、青少年には一休みのできるホッとできる空間が必要で、休憩してからまた頑張れるように、青少年の人生に準備の時間と空間を設けようと、それに青少年の遊びの溜まり場としての「基地」という意味付けで、この建物を「青少年基地」(Teenagers' Base)と名づけた。

基地でのすべてのサポート事業は現在、無償で提供するので、年間約360万元(約1100万円)の費用が必要になる。その運営上に必要な資金は極わずかの割合を政府からの補助金を取得する以外に近年、手作り石鹸や節句時期に企業から得た粽の販売もしているが、殆どは「人本」教育基金会の活動収益、出版物、講座提供から得た収入及び寄付金でまかなわれている¹³。

② 時期区分と変容

基地のこれまでの経過は大きく三つの時期に分けることができる。萌芽期、基礎形成期と確立期である。

* 萌芽期(開館～2003年夏) — 遊びの場

萌芽期は2001年12月の開館から2003年6月までの約一年半の期間である。萌芽期で基地は主に青少年に遊びの場という機能を発揮し、付近に住む青少年の溜まり場となった。当時、青少年が主体になり、サークルを組織し運行していけるようにサポートしようと試みた。しかし、そのノウハウや経験が基地にくる青少年たちにはまだ持っていないことに気づき、その後、スタッフたちがサークル活動を企画し、青少年が参加する形へと変わった。また、初期に、基地側が基地に様々な可能性を与えようと、地域住民や学校や親と共に、青少年をサポートしていこうといろいろな活動を試みた。例えば、地域のボランティアのお母さんたちを募集し、青少年に書籍に興味を持たせようと物語の読み聞かせの活動を開いた。更に、地域の子持ちの両親に親教育クラスの講座も開講した。しかし、読み聞かせの内容は小学生向きで青少年の興味関心から離れ、中止となった。親教育の講座も認知度が低いなどの原因で、長く続かなかった。萌芽期の基地は、青少年の参加人数がなかなか伸びない問題に加え、地域からの理解関心が低いことで、運行は困難にあった。初期の基地の子の母親兼、物語の読み聞かせのボランティアのMさんも「この時期、基地はどんな方向に進むのか見えなかった」と話していた。

* 基礎形成期(2003年～2007年) — 学習の場から学びの場へ、そして居場所に

2003年の夏休みに現在の館長のJさんと副館長のAさんが基地に就任した。さらに建設的な学び

を提供し、周囲（親や地域住民）から勉学することしか期待されない青少年の学業的困難をサポートしようと「補習授業」をはじめた。基地で補習授業がはじまってから、基地に来る青少年の人数が増加し、三重地域の家庭も自分の子どもに基地で補習授業を受けさせようとした。更に、基地の認知度が少しずつ上がり、三重地域のNPO団体や商店街から基地に活動の連携や参加の誘いもあった。無償でサークル活動など青少年サポートを行うほかに、補習授業も提供することになってから、現実には経済的に学習的に不利益層におかれる家族とその子の利用が増加し、以降、基地の宣伝チラシなどの書類で「弱者（台湾では弱勢）青少年¹⁴」という文字が多く使われるようになり、主要な利用者にもなった。その中で、補習授業を受けに基地に通いつづいた青少年の何人かが、一日に一食しか食事をとることができないことがわかり、基地では食事を提供するようになった。この時期に、基地は遊びの場から学習の場へと展開し、生活面のサポートも加え、基礎は少しずつ形成された。

* 確立期（2007年～）－社会的参加につなぐ

2005年から台湾の一部の青少年が学校における髪型の制限に対し、自らの自主権を取り戻すように様々な団体に助けを求め、最終的に彼らは基地にたどり着いた。基地のスタッフの助言を得て、彼らは「髪型制限反対自治会」を組織し、記者会見などで社会に青少年の自主権の重視を訴える活動を行った。それ以降、基地は青少年が自主権の抑圧という状況に対抗できる力を持つことを信じ、青少年の身近なテーマから少しずつ社会参加へとつなぐように促した。2007年に特別議題の論壇の開講やパレードの参加などを積極的に呼びかけ、青少年の学びの場から社会的参加の場になる新たな動きが進められた。また、2007年の9月の新学期から中学生になる、基地に通っていた小学校6年生の子どもたちのために、中学校2年生と3年生に加え、中学校1年生に対する英語と数学の補習授業も提供するようになり、2007年から基地の現在の支援体制と内容が確立されるようになった。

4. 青少年基地における青少年支援の実態

(1) 様々な側面からの青少年支援

基地に通う基地の子たちは、多く機能不足の家庭に生まれた子である。貧困、片親や共働きのために、子どもに適切な注意を払う余裕がなく、性別によって不平等な扱いをしたり、無関心であったり、さらに暴力をふるうケースもあった。発達障害や学習障害を持つ子もおり、学校で成績が良好的ではない子は半数以上を占める。学歴主義と教科成績重視の台湾学校教育においては、成績が悪い青少年が学校生活で大きな挫折感を抱く。基地の子はこのような排他的な環境におかれることで、よく自己否定の状況に陥る。彼らはそれが自分自身の問題だと思い込み、その抑圧的な状況から抜け出せないでいる。基地はこういう青少年たちに対し、学業補習の授業からはじまり、様々な側面により、支援を行っている。以下は基地で主に行われている「学業支援」、「サークル&活動」、「生活面の支援と悩み相談」、「進路相談」、「社会的参加」の五つの支援項目について、それぞれの内実を説明する。

① 学業支援

基地では中学校 1 年生と 2 年生の青少年に対し、英語と数学の両科目の補習授業を行っている。補習授業をはじめた理由について聞いたら、「*学習上の打撃は（青少年の）人生の重要な打撃であるように気づいたから*」と館長の J さんが言っていた。J さんによれば、基地の補習授業は

「*テストをしない、単純に何回も繰り返す練習はしない、宿題を出さない*」という学校と異なる「*人本*」の指導法で行う。

重要なのは、考える力を養い、学びに対する好奇心と自信を取り戻すことである。

以下は基地における一週間の活動時間割表である。

	月	火 (pm2-9:30)	水 (pm2-9:30)	木 (pm2-9:30)	金 (pm2-9:30)	土 (pm2-9:30)	日 (pm2-9)
中 1	定休日	英語 (pm7-9)	数学 (pm7-9)	英語 (pm7-9)	数学 (pm7-9)	サークル	サークル
中 2	定休日	数学 (pm7-9)	英語 (pm7-9)	数学 (pm7-9)	英語 (pm7-9)	サークル	サークル
中 3	定休日	学業サポート (pm7-9)	学業サポート (pm7-9)	学業サポート (pm7-9)	学業サポート (pm7-9)	サークル	サークル

表のように基地では中学校 1 年生と 2 年生に午後 7 時から 9 時までの間、基地スタッフと大学生の TA が補習授業を行う。期間は冬期夏期休み以外に行い、ほぼ学校のスケジュールと重なる。中学校 3 年生の青少年には授業ではなく、一人一人が自分で学習内容とペースを決め、スタッフがサポートする形である。補習授業の参加者は資源制限のため、一クラス 20 名の定員制限が設けてあり、2010 年の現在では一クラスは基本的に 10 名～15 名の青少年がおり、中学校 3 年生のクラスを少人数の 5 人として計算すると、中学校 1 年生から中学校 3 年生のクラスを併せ、毎日補習授業に参加する人数は約 30 名になる。

基地では教材が学校の教科書と参考書を参考にしながら、「人本」独自の教案を用い、皆で時間を費やし、子どもの困難と解決法を一緒に見つけだそうとする。補習授業を通し、実際に成績が大幅に伸びた子は多数ではない。しかし、基地の補習授業は青少年に「考える」力と学びに対する好奇心と自信を身につけさせた。ある子は自ら「*…答えを言わないで、なぜこうなのか（過程）を教えてください*」とスタッフに言ったことがある。今まで教師から与えられる答えを待っていた青少年は自分の困難を理解しようとする大人たちの姿で少しずつ自分たちで考え、声を出し、「学んだ」ことがわかる。



補習授業中の様子（写真：筆者撮影）



DIY 部の子たちが作った作品

②サークル&活動

学校外での活動が少なかった青少年に社交の場と遊びの場を提供し、サークル活動を青少年と共に進める場所にすることは基地開館当時の一つ大きな目標であった。これらのサークル活動を通し、青少年に視野をひろげる機会を与え、異なる世界や人々と触れ、生活と心が豊かになるほかに、今後の人生選択にも役立てたいという。

基地は開館以来、実に多様なサークルと活動を青少年に提供した。基地スタッフが外部の専門家を講師に招いたり、自ら興味関心のある活動を担当したり、後に大きくなった基地の子がサークルの指導員になったこともある。ギター部、ピアノ部、小物の手作り部、日本語講座、ダンス講座、演劇部、サイクリング部、芸術展覧会めぐり…、スポーツやインドア活動などスタッフがアイデアを出し合い、基地で青少年に豊かな活動を提供するようにしている。



2010年の夏休み期間中に、台北市の東区全体で様々な展覧を展示する「まちのアート展覧会」に参加した基地の子の様子。地べたにくつろぐ犬の気持ちかを体験している。その日の参加者は12名ほど。

(写真：筆者撮影)

青少年の時間を考慮し、これらの活動はほぼ週末と冬期夏期の休み期間に行う。一日限定の活動もあれば、何か月もの長期活動もある（例えば、ギター部、ピアノ部、演劇部）。



左の写真は週末の夜に行った特別講座の様子。一階のロビーで、退職した中学校教員に大学生のボランティアが講師として行い、内容は詭弁と弁証についてである。参加した基地の子は15名ほど。

(写真：筆者撮影)

中で特に説明する必要があるのは、夏休み期間中の二泊三日の体験活動である。この活動は基地を出て、台北県近郊で、ある題目に沿って講義や活動を行う。基地の子だけではなく、三重市の中学校や高校を通じて参加者の募集もしており、多いときに45名ほどの参加者もいる。指導員は基地スタッフ以外に「人本」の人脈から適切な人を見つけ、加入している。その題目は芸術や歴史から、社会的な議題まで幅広い。例えば2006年の夏休みには、三重市にある戦後台湾に移住してきた中国大陸の軍人家族を中心に作られた旧コミュニティ「眷村」の保存を呼びかけるNGOと連携し、「眷村」の歴史と保存活動についての体験活動を行った。2007年、2008年には台北県「^{ダンスイー}淡水」鎮と「^{ジングァーシー}金瓜石」という歴史の古い町と炭鉱町で、台湾の歴史について学ぶ体験活動を行った。2009年には「^{ゴンリャウ}貢寮」

という原子力発電所があり有名な音楽祭の行われる町に行き、「核」と人間による開発がどのように環境に影響したのかについての体験活動を行った。2010年には、「三芝^{サンツー}」というまちづくりに励んでいる農村で台湾の農業や農業に関する歴史について学ぶ体験活動も行った。体験活動期間中にすべての人は現地の学校や教会などから借りた場所で、寝袋などを敷き、睡眠をとる。この体験活動は基地の子だけではなく、基地に行ったことのない子も参加しており、毎年の体験活動だけを参加しに楽しみに来ている子も少なくない。



2010年の夏に行われた「三芝」農業体験活動中の様子。都市に住む子たちは、きれいな水が流れる溝に興味津津のようだ。（写真：筆者撮影）

この様々な活動を通じ、青少年たちは今までの自分と異なる「異文化」に触れることができ、視野を広げた。三重のような地域で今まででネットカフェや、公園での暇つぶしや、暴力団に行く事しか選択肢のなかった学校外生活を基地はこのサークルと活動の提供により、青少年の生活と学びを豊かにした。

③ 生活面の支援と悩み相談

スタッフのAさんによると、「青少年は自己を発揮でき、自己の準備ができる場所が必要だ。しかし、(台湾で)今までは積極的な方法をとるのではなく、警察や教員で(青少年を)封じこんだり、少年刑務所とかもね。また、学校の相談室も機能が発揮されていないのだ。基地(の設立)は社会と対話する機会だ。社会に青少年を理解する機会を与え、ここでは私たちはどう青少年と接し、青少年とはどんな顔を持つのか?」というように、社会に青少年を理解する機会を提供する以外に、「人本」の教育観を実践し、体罰を与えないで教育を行うことはただの理想論だけではなく、実行できるのだということを社会に示したいという意図が分かる。

基地の開館時間は午後2時～9時半までなので、青少年が長い時間で基地を利用することができ、彼らが基地にいる時にスタッフが青少年とコミュニケーションをとることで得た情報をすべてのスタッフに回して情報共有する。不登校、いじめ、悪い言葉遣い、喫煙、飲酒、家庭内暴力、学校での体罰のような問題から、友人との喧嘩、家族との不仲、生活習慣、性的関心などのような青少年の生活で起こりうる様々な問題に基地の子も直面する。毎日基地ではスタッフらが青少年とコミュニケーションをとることを通し、青少年の問題にいち早く気づき、悪化させないように処理し、対応するようになっている。

館長はこう言う。「子どもに必要なのは、そばにいることだ」。基地の子は学校と家庭でよく叱られたり、責められたり、さらに暴力をふるわれることもある。大人に対する不信感と挫折感から青少年

たちは自分の口で気持ちを伝えることができない。しかし、基地ではスタッフたちは批判的な立場に立つのを避け、理解者として青少年の話をうけとめ、その後適切なアドバイスをする。実際にアドバイスをしなくても青少年の表情が楽になった場合もよくある。スタッフのことを「お母さん」、「家族」、「友達」、「お姉さん」のような存在だと基地の子たちは言う。

筆者は調査期間中に、何度も「元」基地の子の姿を見た。高校生、大学生、社会人、兵役中、就職活動中、病気で休学中など様々な背景を持つ基地の子たちは基地を出ても、また時々ここに戻り、スタッフとおしゃべりをし、そして後輩たちとコミュニケーションをする。基地のスタッフたちが包容的な態度で青少年と接することで、青少年が少しずつ変わり、そして自分も包容的な態度で他人と接することができるようになった。

④ 進路相談

基地では中学校 3 年生の青少年に学業サポートクラスを設けてある。人数は一クラスおよそ 5 人になる。このクラスでは学業のサポートだけではなく、青少年一人一人の状況に合わせ、どの学校に進学するかも青少年の希望をきいてから、アドバイスをする。この部分の対応はほぼ館長の J さんが行う。このような進路相談は学校で行われるべきだが、台湾の学校では、日本のような生徒一人一人に進路相談を行う習慣と体制は整備されておらず、また偏差値の高い生徒に対する支援に偏りがち。逆に、偏差値の低い基地の子たちは、学校と家庭からサポートを得られず、誰にも相談できない状況におかれ、こんな時に、基地のスタッフと館長に助けを求めることができ、少しでも抱えている悩みを緩和することができる。学校ではできなかった事を基地はそれを補ったと言えよう。

⑤ 社会的参加

最後では、基地はほかの青少年支援組織と違い、福祉サービスを提供するだけではなく、青少年に社会的参加を促す活動も行っている。青少年生活の身近な話題である体罰や髪型に関する青少年の身体における自主権剥奪の問題や、バイク運転の年齢制限議論から、「人本」が長い間関心を注ぎ続けてきた台湾の有名な人権案「蘇建和(死刑)案」についても、基地でなぜこの死刑判決に「人本」が反対してきたのか座談会を行った。また地球温暖化に関心を持つ団体のパレードなどにも関心をもつ基地の子と一緒に街を出てその重要性を呼びかけた。この社会的活動への参加はスタッフたちが青少年に公民として自分の生活だけにとどまらずに、台湾社会さらに世界に関心をもち、そして行動できるような存在になってほしいという考えに基づく。この意図は「人本」の「人間は自分自身であるべき、道具としてではない」という理念と一致している。

(2) 基地の子たち

基地に通ったことのある青少年は基地の 2010 年ワーク報告書によると既に 700 名にのぼると書かれている。以下は 5 名の基地の子の事例をまとめた表である。すべての基地の子は個々人の状況により一項目から五つの項目に自由に参与することができる。

青少年	参与している支援項目	内実
1、 Eちゃん	①学業支援 ②サークル&活動 ③生活面の支援と悩み相談 ④進路相談 ⑤社会的参加	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校3年生の女の子 ・アスペルガーの症状が見られる ・家庭は経済的に良好ではなく、両親は共働きで、家にいる時間が極めて少ない ・学校では学業に困難を持つ子のために設けられた特別クラスに教科分離で行き来して、所属するクラスのクラスメートとはある種の線が引かれており、「喜憨児」という知的障害児を意味する言葉をかけられ、笑われたことがある。団体活動に参加しない、グループ分けの時はいつも取り残され、クラスメートとよく喧嘩するなど、社会的協調性に欠ける行動をする子だと見られる。 ・学校と家庭において排他的な環境にある。 ・「基地では分からないことがあったら、きけるが、学校では先生に聞けない、『バカだ』と言われるのが怖いから。…もし学校の先生たちも基地の先生みたいになればいいのにな。」また、「学校にいる私と基地にいる私は違う。私は両面人だ。…基地にいる自分のほうが好きだ。」 <p>→「学業・勉強の場」＋「居場所」＋「学びの場」</p>
2、 M君	①学業支援 ②サークル&活動 ③生活面の支援と悩み相談 ④進路相談 ⑤社会的参加	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校3年生の男の子 ・小学校の時に、ADHDと診断され、薬を飲んでいる ・中学校1年生の時から、基地に通いつけている。補習授業だけではなく、ギター一部にも所属し、基地の活動や体験活動にもほとんど参加している。ほぼ毎日基地に通っている。 ・学校では、「学習困難」という枠に分離され、(他に、優秀と普通の枠もある)そして試験用紙で自ら三つの枠の中で自分の属する枠で丸をつけさせられ、排他的な状況にある。 ・家庭の経済的状況は普通であるが、筆者に嘘で毎年家族と一カ月くらいに海外旅行をするなど自分の家族は経済的に非常に良好だと話していた。彼はIとMEがかけ離れすぎてしまい、他人からみた自分と自ら期待を膨らませた自分の間に大きな乖離を持つ子は、自己認識やアイデンティティの確立という課題に直面することで大きな困難を生じる ・「ここは楽しい。大人と子どもみんな優しいほうだ。学校と違う。ここでは(自分が)少し開放的になれるが、学校では内気だった。…ここでの毎日はとても印象深く、例えば昨日は国語と英語を勉強したし、0君とお喋りもした。…私は数学をあきらめかけたが、ここに来たら内容が分かるようになって、あきらめないようにした。…こここのスタッフたちはmotherみたいだ」 <p>→「学業・勉強の場」＋「居場所」＋「学びの場」</p>
3、 Wちゃん	①学業支援 ②サークル&活動 ③生活面の支援と悩み相談 ④進路相談 ⑤社会的参加	<ul style="list-style-type: none"> ・私立女子高校の高校一年生の女の子 ・経済的に余裕をもつ家庭の子 ・学習塾で教師が生徒の悪口を言うということが起こり、いやになって、塾を離れ、基地の補習授業に参加した。学校の学業成績は、クラスで成績が中間に位置する。 ・Wちゃんは小学校6年生から基地にほぼ毎日足を運び、宿題をしたり、お喋りしたり、サークル活動を参加したりする。 ・「こんなところが存在することは想像もしなかった。無料だし、楽しいサークル活動もあるし、本もたくさん置かれて、補習授業もあって、たくさんところに遊びに行くこともできる。本当に遊園地みたいだ。ここではたくさんの人と知り合えるし、元々学校のクラスメートに限られていたが、今は他の友達もできた。大きな家族みたい…以前学んだことのないギターとピアノもここで学べたし、悩みのあるときに、例えば自分の部屋がほしいときに、Aさん(スタッフ)もアドバイスしてくれて…最後は自分の部屋も持った…中学校3年生の時に試験準備でストレスを感じたときにも励ましてくれた…ここはリラックスできる自在的に暖かい場所で、悩みのあるときにいつでも来れる…以前、家では外食ばかりだったが、基地に来てから手料理を食べられるようになり、料理のしかたも覚えた。」 <p>→「遊びの場」＋「学業・勉強の場」＋「居場所」＋「学びの場」</p>
4、 T君	②サークル&活動 ③生活面の支援と悩み相談 ⑤社会的参加	<ul style="list-style-type: none"> ・現在は国立大学の大学生であり、中学校1年生の時に、知人の紹介で基地にはじめて入った。 ・学業的に成績よく、家庭環境も悪くない ・しかし、彼は極めて繊細的な子で、友人関係や家族関係などの人間関

		<p>係には常に疑問や不安を感じ、悩みを抱えている。学業的に問題がなく、内気な性格の子のためなのか、他の成績が悪くて不良行為を犯すような「問題児」と比べ、比較的注目されにくく、いい子でいることが当然のように思われがちという状況から、孤独感に包まれることがよくあるようだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「基地の以前のあるスタッフは家族以外ではじめて怖く感じなかった人で、会って嬉しかった。」また、「セカンドホームのような存在だ」 <p>→「遊びの場」+「居場所」+「学びの場」</p>
<p>5、 Jちゃん</p>	<p>②サークル&活動 ③生活面の支援と 悩み相談 ⑤社会的参加</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校3年生の女の子であり、妹と一緒に基地に通っている。 ・家庭の経済環境がよくなく、両親から無関心な態度をとられ、時々暴力を受けたこともある ・学校ではじめや不登校を繰り返す不良行為で大の問題児として扱われている。彼女の悪い言葉遣いや態度は近所にも知られ、基地スタッフの特別支援対象の一つである。彼女はよく基地の近くにある公園で仲間と集まり遊び、他のグループの子と喧嘩したり、公園で喫煙したり、酒を飲んだりすることもあった。 ・学校や世間から見たらいわゆる「不良青少年、問題青少年」の彼女は学校であきらめられ、社会からレッテル化されることが多く、家族から支えも得られず、排他的な状況におかれる ・しかし、飽きっぽい彼女であるが、基地の活動に積極的に参加し、夏休み以外の平日に、毎日のように通っている。基地で食事をしたり、大声で仲のいい友達やスタッフとお喋りしたり、パソコンでチャットしたり、音楽を聴いたりする。 ・彼女は少しではあるが、変化を見せた→ Jちゃんが中学校3年生になった9月のある日に、ロビーでスタッフと一緒に石鹸作りをしていたときに、周りに基地に新しく来た中学校1年生のADHDの症状を持つ子が大きな声で乱入してきた。以前のJちゃんなら悪い言葉遣いでその子を脅したはずだが、彼女はただその子に「静かにして」と声をかけた。毎日のように悪い言葉遣いをしていたJちゃんが後輩を責めたり、脅したりせずに、普通に声をかけたことはスタッフからみれば、大きな進歩だ。少しながらも、Jちゃんの身に変化が起き、学びが起きた。 <p>→「居場所」+「学びの場」</p>

基地の子にとって、「基地」は他人と交流できる「遊びの場」、学習に対する自信と好奇心を取り戻す「学業・勉強の場」、ありのままの自分を受け入れてくれる空間や人間関係である「居場所」、そして学業以外に人生を歩んでいくに必要な様々な学びができる「学びの場」である。

(3) 基地の直面する課題¹⁵

① 肯定と反対の狭間にある青少年基地

青少年基地の所在する地域—三重は青少年の教育に積極的に関わろうとする人びとが少ないまちである。基地のような青少年施設は台湾では先駆的な試みであり、青少年に遊びの場を提供するという内容からはじまった実践は、元基地の子の母親であるMさんの話によれば、多くの地域住民から見れば、それは勉強もしないで遊ぶ青少年たちのただの「溜まり場」になり、はやくも基地に通う子は「不良」だというレッテルを貼られるようになった。また、隣人のTさんや里長（町内会のリーダーに相応）をはじめとする地域住民は子どもの意思に関係なく、彼らの行動に対する大人の「管理」（その手段として体罰と言語暴力が用いる）を当然のように思う価値観を持つ。これに対し、青少年たちの意思を尊重し、決して叱ったりしない基地のスタッフたちは「管理」の責任をきちんと果たしていない無責任な大人だと思われる。基地と地域の間、教育の価値観にめぐり、「溝」が出て、少しずつ関係が悪化していった。その以降、基地は人数の増加した基地の子に対する「青少年支援」に

没頭し、地域住民との交流については、関心注意を心がけてなく、粗末になった。これが原因で、地域住民との関係が向上しないままに、近年になってもつづいている。それに、2007年の夏休みに基地の子の母親が他の基地の子を叩いた事件が起こり、それ以降、スタッフは基地の子と部外者との間に「保護線」をしいた。外部との関係づくりには消極的になっていた基地は、ますます基地と外部に見えない壁をたてた。その閉塞的な姿勢により、本来、地域に開かれた場所であるような初期の期待も阻害されるようになった。基地の実践は地域においては、肯定する者と反対する者の間に挟まれ、8年間運営してきた。

②基地の発展へと結ぶ今の課題：深まる「溝」による青少年支援の限界

基地の実践による青少年に対する意義については、既に前節でも言及した。しかし、学校と家庭以外にもう一つの「地域」にある場としての基地は、地域という大きな範囲でとらえることはまだできない。地域社会に、もう一つの価値観による青少年支援の可能性を実践により示し、更に青少年に対する理解を深めてもらいたいという考えから、基地は運営してきた。そして、「人本」の価値観に賛同する人びとに対し、ワーク報告などを通し、発信してきた。ところが、この状況と反し、三重地域にある住民には基地は十分な発信をしていない。新聞紙などのメディアにのせられた基地に関する記事を通し、はじめて基地の実践内容を知る地域住民もいる。地域住民が持つ青少年に対する偏見や、青少年支援の方法など教育に対する価値観を変えることが基地の目的の一つであるが、基地が青少年のニーズをよみとり、彼らのエンパワーメントになるように意味のある学びの提供を継続的に進めていき、それを続けようとするればするほど、逆に地域住民の持つ「価値観」との間にある「溝」がますます深まる。

基地スタッフに対し、今後の展望について聞いた。館長のJさんは「さらに社会的（社会的参加）になりたい」「子どもにこの地域の歴史や文化を知ってもらいたい」と話し、副館長のAさんも「地域に根差した活動をしたい」と話していた。「地域」に所在する青少年のための施設であることについては、彼らは自覚を持っており、基地の子に彼らの住むこの三重地域について理解してほしいという考えが見える。しかし、彼らが「地域」に根ざした青少年のための学習施設に発展するには、今までのような部外者と距離を置く姿勢をつづけたら、間にある「溝」は更に深まり、実現するのはさらに困難である。地域「学習施設」から「地域学習」施設になるように発展するには、青少年のエンパワーメントだけではなく、地域住民全体のエンパワーメントも必要である。その為には、基地の現状に対する見直しや、地域住民と連携した施設という元々の理念にもう一度立ち返り、更に今まで蓄積してきた経験を元に新たな方向・方法を模索することが必要であろう。

おわりに

台湾における青少年支援は今まで社会福祉施設に任せ、「高危険青少年」や「虞犯青少年」を対象にし、問題補正という消極的な性質を持つ。一般的な青少年には学校教育と家庭教育に責任を帰する

ことで、公的に社会教育の視点にたつ学校以外の青少年支援体制は整えられていなかった。一般的な青少年と「高危険青少年」や「虞犯青少年」とをどう区別するのは非常に難しいことである。しかし、青少年を区分する以前に重要なのは、すべての青少年がそれぞれの問題を抱え、生きていることに対する大人の理解とそれに対する適切なサポートであるということだ。日本では「ボーダー層」という言葉があるように、台湾でも「^{ビエンウエン}邊緣少年」という言葉がある。彼らは境に立ち、どちらにも属していながら、どちらにも属していないように排除される。「高危険青少年」に対し、事前予防や補導を行うことが可能ではあるが、そうでない多数の「一般的な青少年」は現在の台湾における学校以外の青少年支援体制だと、支援の対象外になり、こういう状況こそが「高危険」であるように筆者は考える。今後、台湾で東南アジアからの移民とその子どもの増加や、インターネット社会における人間と自然や「他」との分離状況がますます加速し、青少年の問題は多様化し、複雑になり、深刻化する一方であろう。

青少年にはそれぞれのニーズがある。遊びの場、リラックスのできる場、悩みを打ち明けられる相手、学校で分からなかったことが聞ける人や、お喋りする相手…基地の子は自分のニーズを満たすために、基地に通いつづける。

青少年基地のような地域学習施設の実践は、地域に所在する身近な場所で、青少年に学校と家庭以外にもう一つの「場」を開き、長期にわたり無償で一般的な青少年から虞犯青少年と不良青少年まで、包摂的かつ積極的に、彼らの問題が深刻化する以前に一人一人の状況に則した適切な対応と支援を通し、青少年の問題を緩和し、さらに多側面な学びの提供により、青少年のエンパワーメントにもなった。このような実践は、社会福祉に偏る消極的な台湾青少年支援の現状において、もう一つの可能性を見せた。

しかし、基地には、一部の地域住民から青少年に対する偏見と不理解や、教育に対する価値観（例えば管理教育、成績重視、体罰）の相違とスタッフたちの閉鎖的な姿勢によって、地域に開かれた場所であるような期待と、「地域学習」施設であるように地域に根差した学びの提供という展望も阻害され、大きな課題として残された。

台湾における青少年政策は、基地のように、すべての青少年を対象にした学校と家庭以外の地域学習施設の必要性に目を向ける必要がある。しかし、基地の直面する課題のように、地域住民による青少年に対する偏見と不理解や、青少年に対して大人の言うことを聞き、勉強と成績だけを重要視するような教育観を持つ環境では、地域学習施設は青少年支援にいかなる意義を持っていても、周囲との価値観の相違が故に阻害される可能性がある。

しかし、台湾政府による公的な資源提供と体制づくりの保障と重視があれば、地域住民の理解もより可能になり、青少年のための地域学習施設は、地域住民の参加から個々のエンパワーメントにつながり、その地域全体の学習施設へと展開していくことが期待できる。

本稿は台北県三重市における青少年基地の実践例を取り上げ、台湾における青少年のための地域学

習施設の意義と課題を探ってきた。しかし、単一施設の制限された文脈においてだけでは、地域学習施設全体の発展の可能性を実証することはまだ不十分である。地域学習施設という名のように、この施設は地域に拠点を置くことが前提なので、都会と田舎や、原住民族と新住民の多い地域など、その地域の文化、民族、歴史の文脈に応じ、青少年のニーズに適したソフトとハード面を備えた施設の形成には、そのローカルの人びとによる土地に立つ様々な試行錯誤を経て、青少年やその地域の住民に対し、はじめて意味のある実践が成り立つのだ。ここで、地域学習施設は単なる地域に所在する「学習施設」だけではなく、「地域学習」の施設にもなりうるのである。

他に、青少年のストレスとなる学校教育の体制内変革や、青少年とその属する家族にかかわるさらに大きな就業や生活保障に対する政府支援政策の見直しなど広範囲な問題も考えられる。本稿ではこのような膨大な事に挑むことはできない。しかし、青少年のニーズと社会のニーズを政府より先取り的によみとった青少年基地の試みを示すことができた。そのことで、公的な地域学習施設による青少年支援の必要性をよびかけ、人びとの青少年に対する理解にとつながり、青少年にフレンドリーな環境を作ることを期待したい。

今後、台湾各地に既存の社会教育施設、図書館やカルチャーセンターなどの拠点を有効的に利用し、1997年からすすめられ現在は既に87校ある成人のための生涯学習施設—コミュニティカレッジ¹⁶のように、台湾全島にわたる各地に青少年のための地域学習施設が発展することを期待したい。

最後、本稿で言及した第三の場の必要性については、近年日本で様々な議論と実践が積み重ねられてきた。そこで示されている「居場所」づくりの実践とその意義は、参考になるものも多い。しかし、日本社会における青少年問題と台湾社会における青少年問題とその問題に対応した公的及び民間からの支援体制は、文化や歴史などの地縁的関係の相違により、それぞれ特異なものを持つという理解も得た。

両国にある青少年問題は類似したり、重ねたりする部分もあるが、異なる部分もある。台湾社会では青少年のいじめや自傷行為も多発しているが、日本のようにひきこもりによる不登校の現象がまだ多くなく、暴力団入りや高度な学歴社会・競争社会におかれた青少年たちの疲れが目立つ。他に、日本では児童館から公民館まで、子どもから大人まで、市民に提供されている公的な社会教育施設の整備は長年の発展歴史により成り立った。しかし、台湾の社会教育はまだ18歳以下の青少年と子どもには十分な注目と関心がない。台湾の社会教育の発展には時間や実践など経験の積み重ねは当然のことだが、政府の政策方針の変革が大いに必要である。この点では、日本や他国の経験から参考し、学ぶ事も多いであろう。それぞれ持つ文脈が異なるが、青少年の問題を解決していくこと自体は同じである。

参考文献

- ・ 久田邦明 編著『子どもと若者の居場所』萌文社、2000

- ・ 小川博久・岩田遵子 著『子どもの『居場所』を求めて—子ども集団の連帯性と規範形成』、ななみ書房、2009
- ・ 田中治彦 編著『子ども・若者の居場所の構想—「教育」から「関わり」へ』学陽書房、2001
- ・ 子どもの参画情報センター 編『居場所づくりと社会つながり』萌文社、2004
- ・ 佐藤一子 編『生涯学習がつくる公共空間』柏書房、2003
- ・ NHK「14歳・心の風景」プロジェクト 編『14歳・心の風景』NHK、1998
- ・ 鈴木敏正 著『生涯学習の教育学—学習ネットワークから地域生涯教育計画へ』北樹、2004
- ・ 鈴木敏正 著『教育の公共化と社会的協同—排除か学び合いか』北樹、2006
- ・ 鄭月琴 著『非営利組織推動青少年休閒營隊之研究—以飛鷹青少年成長中心為例』國立政治大學社會科學學院、2006
- ・ 王嘉鈴 著『臺灣地區公共圖書館青少年服務現況與發展之探討』國立台灣大學圖書資訊學研究所、2000
- ・ 王良珍 著『基督教會推動社區學習策略之研究』國立臺灣師範大學社會教育學系在職進修碩士班、2005
- ・ 盧佩均 著『台北市青少年外展工作服務方式之探討』東吳大學社會工作學系、2001
- ・ 葉大華 著『邊緣青少年的工作世界：一個解釋性互動論的研究』國立陽明大學衛生福利研究所、2005
- ・ 張澤銘 著『社會邊緣青少年使用即時通之研究』國立中山大學資訊管理學系研究所、2005

1 教育部（日本の文部科学省に相当）ホームページの公開資料より

2 「青少年政策白皮書」—行政院青年輔導委員會ホームページ

3 陳思先、「青少年政策白皮書之分析」財團法人國家政策研究基金會、2005

<http://old.npf.org.tw/PUBLICATION/EC/094/EC-B-094-003.htm> (2010年12月検索)

4 楊碧雲「台湾の社会教育施設の体系化」。小林文人・佐藤一子編著『世界の社会教育施設の公民館—草の根の参加と学び』、2001年、エイデル研究所、p215

5 三重市役所HP <http://www.sco.gov.tw/121.aspx>(2010年12月検索)

台北県三重市は2010年12月25日以降、台湾の新しい行政区分により、新北市の三重区になる。

6 Wikipedia—<http://zh.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%89%E9%87%8D%E5%B8%82> (2010年12月検索)

7 学校によって時間が異なるのだが、三重市のある高校生によると、彼の所属する高校の夜間自習は夜9時までだという

8 胡裕偉、羅喬文『台北市高中生休閒活動參與現況之研究』(The Study on the Leisure Activity of High School Students in Taipei City)、2009年

9 以降も言及するが、森林小学校は人本教育基金会上に属され、政府に認証されたオルタナティブ小学校になっており、台湾版「サマーヒルスクール」と言われている

10 1979年の世界人権デーに台湾高雄市で行われた雑誌『美麗島』主催のデモで、警官と衝突し、主催らが投獄されるなどの弾圧に遭った事件。この事件は台湾の民主化に大きな影響を与え、今日の議会制民主主義や台湾本土化へと繋がった。
wikipedia を引用

11 森林小学校のブログ—<http://hef1987.pixnet.net/blog/post/24318498> (2010年12月検索)

12 『人本教育札記』、No.150、2001年12月号

13 「人本」の資金収入については2008年の場合に、活動収入は8350万円(総収入の65%)、寄付金収入は2445万円(19%)、出版物などの販売収入は2018万円(16%)、政府からの補助金は35万円(0%)であった。「2009人本之友會訊」から引用

14 「弱勢青少年」というのは生活の面や学習の面で不利益な扱いをされている青少年をさし、例えば不登校、貧困、片親、学習困難など家庭と学校の機能がうまく発揮されていない状況におかれる青少年のことである。

15 この節のすべての内容は「人本教育札記」のNO146、150、156、197、208、215、217、223、224、225、227、228、229、233、239にある内容と基地のワーク報告と筆者による聞き取り調査で得た情報により作成された。

16 そのほかに、分校の18校と原住民大学の14校もある。

社団法人社區大學全國促進會 HP—<http://www.napcu.org.tw/napcuwebsite/> (2010年12月検索)